いつもあなたと共にいる

ドン・ボスコの風

BOLLETTINO SALESIANO • DICEMBRE 2008

特集 教育を考える

今こそ必要なドン・ボスコの教育法

第１回●座談会

「教育の現場から」-前編 -

スペシャル・インタビュー

雅楽師 東儀秀樹氏に聞く

NO. 2
2008年12月

「風」のカレンダー

十二月 降誕祭

クリスマス、それは救いの始まりの日。

今から二千年以上前の出来事です。ローマ皇帝アウグストゥスは、支配する広大なローマ帝国の人口調査のために住民登録を命じました。そこでユダヤの人々もみな自分の生まれ故郷に帰らなければなりませんでした。

貧しい大工のヨセフも身重のマリアを連れて故郷のベツレヘムに戻ってきました。間もなくマリアは月が満ちて、宿屋の馬小屋で男の子を生みました。宿屋は故郷へ帰る人々でいっぱいで、彼らのために部屋が空いていなかったからです。

その時、野原で羊の見張り番をしていた羊飼いたちの前に天使が現れ「今日、ベツレヘムであなた方のために救い主がお生まれになりました」と告げました。この世でいちばん最初にこの喜びを伝えられた羊飼いたちは急いでかけつけ、牛や馬たちに囲まれて飼い葉桶の中ですやすや眠るみどり児を見たのです。貧しさゆえに人口調査の対象にもされず、差別を受けていた羊飼いたちでしたが、神さまは彼らを忘れることなく愛し、世界中の誰よりも先に救い主イエスさまに出会えるようにしてくださったのです。

私たちに父である神の愛を伝え、真の幸福とは何か、天国へ行くにはどうしたら良いかを教えてくださるために、神のひとり子、イエスさまはこの世に生まれてきたのです。二千年以上前の「今日」誕生されたそのみどり児は、悩み悲しみ苦しむ私たち、差別を受け無視されている私たちの人生に寄り添うために「今日」再びお生まれになります。あの夜の羊飼いたちのように、クリスマスの夜、私たちの心も平和と喜びに満たされることでしょう。

（M・K）

サレジオ学院のホールを彩るプレゼピオ（イエス誕生のシーンを再現する馬小屋の飾り）

［写真：Fr. 田沢］

本誌記事中、氏名の前のFr. Br. Sr. はそれぞれ、カトリック神父(Father)、修道士(Brother)、シスター（Sister）であることを示します。

巻頭言

ドン・ボスコの心で教育する

サレジオ会総長 Fr. パスクアール・チャーベス

ドン・ボスコは、若者の救いのために一生を捧げようという情熱を持ち続け、独創的な教育の理念を持っていました。その理念を一言で言い表わすなら「お父さん、お母さんの心をもって教育に当たる」ということです。ドン・ボスコの考え方に基づいた教育者のあり方としては、以下の四つの条件を満たすことが必要とされます。

1 芸術家的な創造性を備えること

ドン・ボスコは、若者を愛し若者に愛されることを望みました。そのために教育者は、ドン・ボスコが発揮した芸術家のような創造性を備え、青少年との友情を醸し出すという慈愛の姿勢を持つことが必要です。このことを私たちは、ドン・ボスコのカリスマ的な教育法と呼ぶことがあります。

2 まず若者との信頼関係を築くこと

青少年を教育するに当たっての出発点は、教育者が率先して青少年の中に一歩踏み込むことです。ドン・ボスコは、教育される立場の青少年たちが納得し自由な心で教育者に協力する体制を整えなければ教育は不可能だと確信しており、責任を分かち合うことを通して若者と接していました。若者が受けるべき働きかけと、教育機関が実際に与えている内容にずれが見られる現代において、このことがますます重要なこととなっています。

3 新しい人間像を示して教育すること

ドン・ボスコの教育における信念は、いうまでもなくキリストとの関係に根ざすものです。つまりその目標は、キリストが見せてくれる新しい人間像に向かっていくことです。私たちカトリック信者の「道、真理、命であるキリストにおいて皆兄弟である」という考え方は、決して宗教的な教えのみならず人類の歴史の目的でもある、というものです。教育者は、神が父であると教えてくれるキリスト自身を新しい人間像とし、それを理想と定めることが必要だということです。

4 予防的に働きかけること

教育者は、前向きな見方を示し善の魅力を見せると共に、若者が心の底から喜んで自らの意思で善を行い、間違いを避けながら将来に向かわせるよう働きかけるための技術を備えることが必要です。この技術を私たちは、予防的な方法（Preventive System）と呼んでいます。

これが、私たちサレジアン・ファミリーが共有する青少年教育の理念です。

出典：サレジオ会本部BS誌二〇〇八年三月号　巻頭言の要約

編集部注：Preventive Systemは、日本では「予防教育法」と訳されていますが、本誌では「予防的方法」と表記しています。

その時から私は変わった。

サレジオ会日本管区長
Fr. オランド・プッポ

今回の特集テーマは、ドン・ボスコ自身が実践し、今では世界中に広まった彼の教育の秘訣「プリベンティブ・システム：予防的方法」です。このドン・ボスコの勧める教育方法について、私が体験したこととその結果をお話ししましょう。これは決して自分を誇示するためではなく、ひとつの実例として皆さんと分かち合うためです。

私は現在六七歳です。四三年前に宣教師としてアルゼンチンから来日しました。振り返ってみると、十八～十九歳までの自分とその後の自分はかなり異なっていると思っています。青年時代は、微笑みに乏しく、カッとしやすい怒りっぽい性格でした。しかも人見知りがひどく、気の合わない人に対しては反抗的でした。正義感は強いほうでしたが、「憐れみ」と「人間味」が足りないキツイタイプでした。勉強はできるほうだったので、できない仲間を軽蔑とまではいかなくても軽んじていたことは確かです。スポーツも案外得意だったのでリーダー的な立場が与えられていました。しかし試合に負けた時には、チームの仲間たちは皆、私が爆発するのを避けるために姿を消した方がいいとさえ思っていたほどです。

あるとき私は、サレジオ会の神父に呼ばれ「本音を言わせてもらうよ！」と、私自身も気づいていなかったありのままの私の姿を的確に指摘されました。日頃の私の問題ある言動を具体的に挙げながらも、彼はいたって平穏に、愛情のこもった、優しさと安らぎのあふれた顔で、私を傷つけないように言葉を選びながら話してくれました。時々、神様に祈っているかのように手を組んでいたことを、今でもはっきりと思い出します。話の最後に、結論として言ってくれた言葉はこうでした。「今、この瞬間から向こう一年間、私は毎日欠かさず君のそばにいる。必ずいるから、君が口を開く時や怒りたくなった時、まず私を見なさい！それだけでいいから！」

実際は大変でした！　彼を見るたびに、彼は自分の唇にチャックを閉めるような動作をするのです。「見られたくないな～！」と私は何度も思いましたが、その神父は驚くほどの根気強さで私を見つめ、見守ってくれました。一年が経ちました。それ以来現在に至るまで、私は怒ることもなければ、心の静けさと微笑みを無くしたことはありません。四二年来の私を知っている誰にでも聞いてみてください。きっとこのことを証言してくれることでしょう。おかげで私は、毎日気持ちよく生きています。

予防的方法というシステムを、言葉ではなく身をもって示してくれたあの神父に、私は心から感謝しています。彼を通して私の中で働かれた神様は素晴らしいと、今でも毎日感動しています。

A DAY IN THE LIFE OF DON BOSCO • EPISODE 1

少年院の子供たちを遠足に連れ出した。

何年も前からドン・ボスコは、刑務所の少年囚を定期的に訪れ、彼らと友達の関係になっていました。一八五五年の春、ドン・ボスコは塀の中に閉じ込められている少年たちに喜びと希望を与えたいと思い、彼らを遠足に連れ出す計画を立て、刑務所長に申し出たところ「それはまじめな話ですか」と取り合ってもらえませんでした。

そこでドン・ボスコは、内務大臣を訪ねてその許可を願い出ます。大臣から呼ばれて「許可を出しますが、秩序を保つために、私服の警官をつけましょう」と言われたドン・ボスコは、「閣下、ありがとうございます。でも私はひとりで彼らを連れて行きたいのです。どうぞ私を信用してください。」と答えます。

ドン・ボスコは遠足の前日、許可が下りたことを少年囚たちに告げ、飛び上がらんばかりに喜こぶ彼らにこう説明しました。「私は大臣に、『彼らは規律を守ることができます。そして、明日の晩にはひとり残らずここに帰ってきます』と宣言したのです。皆さん、秩序を乱すようなことは絶対しないと約束してくれますね?」と言うと、彼らは「もちろん約束します!」と声をそろえて答えました。

翌日、ドン・ボスコに伴われた百五十人の少年囚は、郊外の教会に入りドン・ボスコの捧げるミサに参列しました。その後愉快に遊び、楽しく弁当を広げ、夕方には一人ももれることなく刑務所に戻ってきました。

遠足の報告を受けた内務大臣は、感嘆してドン・ボスコにこう問いかけました。「お骨折りありがとう。しかし神父さま、あなたにはできてどうして我々にはできないんでしょう」と。ドン・ボスコは次のように答えました。「閣下、国家は威力によって人に命じたり人を罰したりしますが、私たちが持っているのは道徳に訴える力であって威力ではありません。私たちは、神のみ言葉をもって彼らの心に話しかけます。」

ドン・ボスコが繰り返して言っていた「教育は心の問題です」という言葉が示すように、彼の教育の根底には少年たちへの心からの信頼があり、またドン・ボスコ自身が互いの信頼を時間をかけて培ってきたという事実があります。お互いに信頼しあう関係こそドン・ボスコの、魅力的で感嘆すべき教育の成果の大切な要素といえるでしょう。

Fr.アキレ・ロロピアナ

特集●教育を考える・今こそ必要なドン・ボスコの教育法

第一回・座談会「教育の現場から」前編

「大切なのは子供たちと一緒にいること。」

切封千津子氏（サレジオ小学校・中学校養護教諭）

雨宮泰樹神父（サレジオ会）

大森隆實氏（目黒星美学園小学校前校長）

稲川孝子シスター（サレジアン・シスターズ）

ドン・ボスコが青少年と出会い、その教育に当たってから一五〇年。その教育の遺産は時代を超え、国境を越えて今もサレジオ会、サレジアン・シスターズの学校教育の中に脈々と受け継がれています。一五〇年前の教育法が、この時代も豊かな実りをもたらしているのはなぜか、教育の現場に携わっておられる方々に語っていただきました。

司会（編集部）　大森さんは小学校、切封さんは小・中学校、雨宮神父は中高の男子校、稲川シスターは女子短期大学、という教育の現場で青少年の教育に従事されています。そのご経験をふまえて、ドン・ボスコが考えていた教育の方法がどういうものなのかお話を伺いたいと思います。

大森　まず言えることは、日本全国にいくつもカトリックの学校はあり、キリスト教に基づいた教育というのはされていますが、修道会の創立者自身が教育者としての理念をこんなにもはっきりと掲げて教育にあたっているサレジオ会、サレジアン・シスターズの学校は、すごく恵まれていると思いますよ。

　ドン・ボスコの教育法がなぜこれだけ世界中に広がっているかというと、子どもがどういう人であってほしいか、子どもと接する人がどうあるべきかということを、方法論ではなくドン・ボスコ自身の姿を通してしっかりと次代に伝えていったからでしょう。

雨宮　一五〇年前にドン・ボスコがやっていた方法を、この現代もそのまま取り入れて青少年を教育しているということ自体もそうですが、このサレジオの雰囲気とかやり方というものを絶やさず受け継いできた先輩たちってすごいなと思います。

大森　サレジアン・シスターズでも同じことが言えますね。日本に最初にシスター方が来日したのは七九年前ですね。シスター方は、学校教育のプロであったかどうかはともかく、女子教育を始める時、シスター方ご自身がドン・ボスコを示していたという点ではプロだと言えます。若者を教育したというよりは、生き方を示したということでしょうか。

今こそ必要なドン・ボスコの教育法

司会　一五〇年前、教育についてドン・ボスコはどんなふうに考えたんですか？

雨宮　当時は、生徒に規律を与え、違反者を見つけたら罰を加えるという方法が極く一般的で、ドン・ボスコはその方法を禁圧的教育法と呼びました。ひょっとしたら今もそんな学校はあるかもしれません。でもドン・ボスコはその正反対で、大切なことは指導する側の者がいつも生徒を見守りながら、父親のような心をもって、話しかけたり、よい手本を示したり、励ましたり、注意を与えて規則を思い出させて自分から守らせようとしたんですね。

司会　その時代としては画期的な方法だったと思いますが、ドン・ボスコがそこに思い至るきっかけはどんなことだったんでしょうか？

雨宮　それはドン・ボスコ自身の体験から来ています。まず一つ目は、彼が司祭になって少年刑務所の少年たちの相談相手をしていた頃、刑務所に入った時よりも出所した時の方がむしろ悪くなっている少年たちの姿を見て、「若者がここに入らないように予防策を講じなければならない、事が起こってからでは遅い」と考えました。二つ目に「子どもたちの心を動かさないと子どもたちは変わらない、罰では心を動かせない」と悟りました。まず信頼関係を築き、その上で子どもたちの心に話しかけていく、というやり方です。

司会　そのドン・ボスコの考え方が、一五〇年経った今も必要ということなんですね？

大森　そうですね。今だからこそ、ドン・ボスコの教育者としての姿を再認識する必要があると思いますよ。最近の親は、子どもにどんな人生を送って欲しいかと聞くと、いい学校に入っていい職業について、いい人と結婚して経済的に恵まれて…と答えると聞きました。子どもに聞けばやっぱり同じような答えが返ってきますよ。そうじゃない。一番大事なのは、親も先生も「子どもが本当に幸せになって欲しい」と願うことですよね。この本当の幸せというものはこういうことなんだよと伝えた、それがドン・ボスコの教育の原点だと思うんですよ。

切封　大人は「自分はどんな人間になりたいか」、「子どもはどんな大人になってもらいたいか」というビジョンを持つ必要があると思います。一流大学を目指す、医師に、弁護士に、官僚になりたい、それはすばらしいことですが目的ではなく、その仕事を通して他者と共にどう生きるか、キリスト教の学校は特にこのことを示唆しなければならないと思います。進学校といわれている学校ならばなおさらのこと、グローバルに通用する人材形成を果たすということを課題とすべきだと思います。

大森　僕の考えてる幸せっていうのがあるんですよ。それは誰からも愛されるような人になること、誰からも愛されるためには、人と仲良くできなくてはいけないし、人の痛みもわからなくてはいけない。自然も大切にしなくてはいけない。そのためにはたくさんのことを学ばなければなりません。人と協調しながら周りの人を認めていく。周りを認めなくては自分を認めてもらうことはできないですからね。そういうことを学ぶのが学校という場でもあると思うんです。

稲川　今こそ、ドン・ボスコそのものが生きていてほしい時代だと思います。ドン・ボスコがいた一五〇年前のイタリアのトリノには、大人が子どもの人権を認めるどころか、子どもたちを働かせ、搾取していたという厳しい現実があったわけですよね。そんな子どもたちの姿を見てドン・ボスコは、彼らに夢を与えたい、しあわせな人生を歩んでほしいと願って「良い大人と出会うことは、君の人生にとって宝だよ」と言っています。

今この世の中はどうですか？　はっきり申し上げて、私たち大人は子どもたちに希望を与えていますか？　大人が自分のことでいっぱいで、子どもの姿を、心を見る余裕がなくなっていませんか？

いつの世も大人の責任なんです。あの時代に本当の大人が少なかったから、ドン・ボスコは自分が本当の大人になって子どもと出会おう、子どもを救おうと思って神父になったと、伝記に書いてあります。だからパパもママも、先生も神父様、シスターも、私たち一人ひとりが本当の大人、ドン・

ボスコにならないといけません。

司会　なるほど。一五〇年前のあの時代に、貧しさで将来の希望もなく、何のために生きているのか、この先どうしたらよいのかと困っていた青年の姿は、今もそのままあるのではないでしょうか。どんどん変わる政治経済情勢の中で、大人の混乱はそのまま青少年に影響を及ぼしていますし、教育の格差の中で切り捨てられていく子どもも増えています。経済的には豊かでも、子どもたちの居場所が家庭の中にもなくなっている時代が来てしまっています。だから、ドン・ボスコなら、今何をしたかという発想が求められるのですね。

予防的方法とは

司会　ドン・ボスコは、どんな方法で子どもたちを教育したんですか？

雨宮　それは、ドン・ボスコが一八八四年に文章としてまとめたものがあるんですが、「これが私の教育法です」と宣言した、「プリベンティブ・システム：予防的方法」というもので、日本語では「予防教育法」と訳されているものです。

大森　プリベンティブ・システムっていうのは、どういう風に生きていったらいいかっていうことをあらかじめ予見していて、そのために自分が今どうするのかを判断できる人に育って欲しいっていうことだと思うんですけど。マニュアルがないと生きていけなかったり、横並びじゃないと不安で不安でしょうがないという今の世の中にこそ、ドン・ボスコの考え方っていうのは大事な心強いポジションだと思います。「予防」というと何か悪いことから身を守るみたいな感じがして、正しい意味が伝わりにくいですけどね。

切封　私はサレジオの学校に勤めて十五年になります。勤め始めてすぐに「この学校の理念は何ですか。教育目標は何ですか。」と外来者から度々尋ねられ、大慌てでドン・ボスコ関係の本を読んだものでした。ドン・ボスコの教えはストレートで衝撃を覚えましたが、その頃の私にとってはまだ借り物の服を着ているというような感じでした。

　ドン・ボスコが言う予防的な環境を作るということが、いま一つ分からないでいるんですが。喧嘩や争いごとなどトラブルが全く無く、いつも笑って楽しく過ごすことが果たして良い環境なのでしょうか。人と人が交われば煩わしいことは必ず生じます。喧嘩、揉め事、あらそい、物隠し、嫌がらせなどなど、無ければ無いほうが親だって教師だって安心だし楽です。けれども、そんなことは現実ではありえませんね。ですから、トラブルが生じた時、それはチャンスの時と捉えて、頭ではなく心と体で納得できるような丁寧なかかわりが必要です。子どもが納得して理解し合えて問題が解決したときには、子どもも教師も、親も変わっているはずです。今まで見えなかったものが見える、黒い霧が取れ青空が広がるような、上手く言えませんが爽快な気分、今までの私とはちょっと違う私と感じるのではないでしょうか。

司会　自ら納得させる、ということは、ドン・ボスコもおっしゃっていますね。

切封　子どもを納得させるにはすごく時間がかかることもあるでしょうけどね。でも、「それは対症療法ではないか？　それでは遅い。」と言われたことがあります。どうなのでしょうか。私には上手く説明できませんが、子どもたちの目の前に現れる問題、越えねばならない障害物を大人が取り除い

てしまうことは、子どもにとってはむしろ不幸なことなのではないでしょうか。子どもたちはまだ未分化です。人と交わることで生じる嫉妬、怒り、憎しみ、悲しみなどの感情の表出を上手くコントロールできません。その処し方を今学んでいるのだと思います。

大人は、分からない時は「分からない」と子どもに伝えればいい。ありのままの私、欠点だらけの私と、ありのままの子どもとのコミュニケーションが大事なのではないでしょうか。

雨宮　その通りだと思います。まず、トラブルがないこと、その要因を完全に排除することは不可能です。また、ドン・ボスコは対症療法を排除したわけでもありません。ドン・ボスコが対極に考えている状況とは、当時の少年刑務所や路上のことであって、あまりに劣悪な環境であるため、よりよいものを選択すること自体が非常に難しい状態です。何色にも染まりうるデリケートな十代の少年たちに、むしろより良いものを選択できるような環境を提供する必要があるとドン・ボスコは考えていました。ドン・ボスコが理想とした予防的な環境がオラトリオ、つまり、二十四時間サレジオ会員が彼らと共に生活する環境です。当然、その生活の中に人間関係における対立も障害も自分自身の内側にある課題もあるわけで、それらを少年たちが乗り越えていくのをサポートするのがサレジオ会員の「アシステンツァ」です。この全体がオラトリオという予防的な環境であると考えていただけたらいいと思います。

司会　だいぶ前にドン・ボスコ社から発行された『ドン・ボスコの心』という小冊子の中で、興味ある記事を見ました。登校拒否が問題視されるようになってから、文部省だった時代の文科省が「学校不適応対策調査研究協力者会議」というところから出したものなんですが、それまで登校拒否を出した場合、対症療法に重点を置いて取り組んできたけれど、これからは予防に取り組もうと予防策を、

という記事です。

具体的には、

・子どもが毎日の学校生活の中で「必要とされる存在と感じるように教師が配慮すること、

・集団生活の中で好ましい人間関係を築いていく力を育てること、

・画一的一斉的でなく個に応じた学習指導を行うこと

などを挙げています。そして日頃から教師と子ども、あるいは子ども同士が温かい人間的な触れ合いを結ぶ必要があることを強調しているんです。

登校拒否という状況に陥らないために、今の段階からこういう風にコミュニケーションをとりましょう、という予防的なやり方です。これって一五〇年前にドン・ボスコがやっていたことですよね。

少年たちと一緒にいる

雨宮　ドン・ボスコのやり方で一番大切な方法は「少年たちと一緒にいる」ということです。ドン・ボスコは少年たちといつも、休憩時間も一緒にすごしました。先ほど申し上げた「アシステンツァ」ですね。サッカーで「アシストする」という言い方しますがあれと同じ意味です。生徒一人ひとりと心を通わせるために、彼らと共にたくさんの時間を過ごし、一人ひとりに「心のこもった言葉」をかけていました。

でも、いつも共にいるということは、現実的にはなかなか難しいですよ。私は中高生と六年間寮生活を共にした経験がありますが、彼らと二十四時間一緒にいるということは並大抵のことではありません。問題も起こる、中高生特有の駆け引きもある、その瞬間瞬間の状況と相手をしっかり見つめながら彼らと向き合っていくのはとてもエネルギーの要ることですから。でも、私自身がそういった環境で育ったことと、その中で彼らと共有するたくさんの喜びがあるからこそ、彼らと一緒にいることが楽しく、サレジオ会員でよかったなと実感できるわけです。いろいろ制約がある中でもできる限りドン・ボスコのスタイルで彼らと一緒に成長していきたいと思っています。

切封　子どもたちが今何を求めているのかを知ることができるかどうかは、子どもたちに対する関心があるかどうかによると思います。子どもがSOSを出していても、一緒に遊ぼうモードを出していても、関心が無ければキャッチできません。アシステンツァを考える時にも、教師はただそばにいるだけではなく、このキャッチする能力があるか無いかが試されるのではないでしょうか。

司会　『共にいる』ということは、そこに子どもたちを温かく見守るまなざしが大切ということですね。ドン・ボスコの教育法というものの背景が少し見えてきました。ここでいったん休憩として、この続きは次号の「ドン・ボスコの風」に掲載ということにさせていただきます。

■プロフィール（五十音順）

Fr. 雨宮泰樹（あめみや・ひろき）サレジオ会。ニューフロンティア担当。

Sr. 稲川孝子（いながわ・たかこ）サレジアン・シスターズ（扶助者聖母会）。女子国際ボランティア組織VIDES JAPAN代表。

大森隆實（おおもり・たかみつ）目黒星美学園小学校前校長。日本私学教育研究所専任研究員。

切封千津子（きりふ・ちづこ）サレジオ小学校・中学校養護教諭。

往復書簡

第1回

「あの人にこんなことを聞いてみたい」そう思ったことはありませんか。第一回目は、今年サレジアン・シスターズの一員として初誓願の宣立[1]をしたばかりの川尻望シスターの質問に、シスターになって初誓願から五十年目のお祝いを迎えられ、今もサレジオ神学院の司祭・修道士・学生のために奉仕なさる佐藤テレーザシスターがお返事をくださいました。

シスター佐藤テレーザ様

豊かな実りをもたらした秋も終わり、主のご誕生のお祝いを待つばかりとなりました。

シスターこんにちは。お元気でいらっしゃいますか。シスターが五十周年を迎えられた今年、私も初誓願を立てることができました。私は高校生の時志願院に入り、シスターへの道を歩みはじめましたが、あれからもう九年…その間、人として大切なことを学び、与える喜び、分かち合う喜びを体験してきました。その反面、「私は本当にシスターになれるのか」と自分に問い続け、私には相応しくないのではという不安で苦しんできました。そんな私を支え、助け、かかわり続けてくださったのが、先輩シスターの存在でした。今振り返れば私は、その時その時シスターの姿の中に、ドン・ボスコやマリア・マザレロと出会っていたのだと思います。ドン・ボスコのそばに集まってきた少年たちは皆「ドン・ボスコにいちばん愛されているのは自分だ」と思っていたそうです。その少年たちが感じた愛と同じ愛の体験を私も得たのです。

この愛の体験を今度は私が、ドン・ボスコの言葉のように「全存在をあげて目の前にいるこの一人の青少年のために自分の全てをかける」そして「そこにこそ喜びを見出す」そんなシスターとして歩んでいきたいと思っています。そう、サレジアンとして生涯を捧げて歩もうとする者にとって、「喜び」は欠かせないものですよね。私はシスターと出会って、この生き生きとした喜びの精神を感じました。

そこで、質問してもいいですか？　五十年の間には、たとえ大変なことがあったとしてもそれを喜びをもって乗り越えられたのだと思いますが、シスターの喜びの源って何でしょうか。ぜひ教えてください。

それでは、シスターお元気で。私のためにどうぞお祈りください。主が、サレジアン・シスターズとして歩み始めたこの私を、青少年の救いのためにたくさんお使い下さいますように…。

シスター川尻　望

シスターへのあゆみ

サレジアン・シスターズの場合

ステップ❶ 志願期

小学生・中高生のあなたなら

シスターになりたい！と思ったら、修学院に入ることができます。ここで普通の中高生として学校に通いながら、豊かな体験を通して大きく成長していくでしょう。

ステップ❷ 志願期

大学生〜大人のあなたなら

神様の呼びかけを感じたら、修学院で第一歩をスタートしましょう。学業が終了したら、正式な志願者のメダルを受けて、一年〜二年の志願期を過ごします。

シスター川尻望様

主は賛美されますように！

初誓願を立てられたことに心よりお慶び申し上げます。私たちの修道院でも、皆心を合わせてシスターのために祈っておりました。私も同じ年に十二名の姉妹たちと共に誓願五十周年を迎えることができましたことを、感謝いたします。川尻シスターより、素敵なお便りをいただいてから、私も過去に神様から種々のお恵みをいただいていたことに思いを馳せております。

通っていた教会のシスターの姿の中に神様を感じとりましたのは私が五歳の時でした。九才の初聖体[★2]のときには、シスターになることを神さまにお約束したものです。そして、二四歳の時に扶助者聖母会に入会するお許しをいただきました。その後、修道養成期間の節目節目で迷いと不安に落ち込みましたが、その都度、神様は私に助け人を送って下さいました。

ある時は父の訓しの言葉であり、またある時はスピース神父の「聖き御血の浄配」の訓話でした。そういう導きを通して神様は私を目覚めさせ、助け起こし、前進する力を下さったのです。初誓願を目前にして迷っていたとき、聖堂の前を通りかかった瞬間、光に照らされたかのように「選んだのは私である」というイエス様の言葉が聞こえました。私の進む道は私が決めるものと思っていましたが、私を選び、道びいて下さるのはイエス様ご自身だ、ということに気がついたのです。

川尻シスターが私に、修道生活の喜びの源は何ですかとお尋ねくださいましたが、それは、主がいつも私のそばに居てくださると感じていることです。

川尻シスターが、主が共に居てくださることに信頼を寄せて、これからの道を歩まれますよう、心よりお祈りいたします。私もまだまだ、主のお望みになられることに応えて参りたいと思っております。

シスター佐藤テレーザ

調布・マンマ・マルゲリータ修道院のシスター方。左端がシスター佐藤テレーザ。

ステップ③ 修練期

修道生活入門の式をして、いよいよあなたも「シスター」と呼ばれ修道服を身につけます。二年後自分を青少年のために捧げたいとの決意が固まったら「初誓願の宣立」を行います。

ステップ④ 有期誓願期

初誓願後の6年間は、一生涯を神様に捧げる儀式である「終生誓願」に備え、自分にさらに磨きをかけます。

「終生誓願」の宣立をした後は、修道者としてさらに深く祈りながら、サレジアンとして与えられた使命を果たし抜きます。

★1 宣立：神様と修道院の姉妹たちの前で自分の決心を宣べ、誓いを立てること

★2 初聖体：幼児の時に洗礼を受けた子どもがある年齢に達した時、ミサの中で初めてキリストの体としてパンを戴くこと。

[イラスト：サレジアン・シスターズホームページより]

雅楽師 東儀秀樹氏に聞く

東儀秀樹氏には、一九九八年に東京渋谷のオーチャードホールで行われたサレジオ会の事業であるドン・ボスコ海外青年ボランティア・グループ（DBVG）主催のチャリティコンサートにご出演いただき、パプア・ニューギニアやソロモン諸島などの教育支援活動に多大なご協力をいただきました。あれから一〇年、益々ご活躍の幅を広げられた氏に、ご自身の受けた教育、そして若者に対する思いなどをお聞きしました。

雅楽の伝承ということ、そしてわくわく感

河合　お忙しい中、本誌のために時間を割いていただきありがとうございます。早速ですが、一三〇〇年続く雅楽という伝統を継承なさっているということが、東儀さんのご性格や生き方などにどのような影響を及ぼしているか、というところから伺いたいのですが。

東儀　雅楽というものが一三〇〇年もの間受け継がれてきたということは、単にその音楽が継承されてきただけではなくて、昔の人の生活の習慣であり、哲学であり、宇宙観であり、そういうものを全て織り込めて継承されてきたのであって、僕はそういった全てを血で受け継いでいるというところに、誇りと責任を感じています。同時に、幼い頃父親の仕事の関係で海外にいたということも、今の僕を造った影響の一つだと思うんです。我が家では父と母が、海外生活中でも日本の風習とか日本の感覚というのをしっかりと日常の中に持ち込んでいたということ、それでありながら海外の人に対してはグローバルな物差しで接することができた。こういう体験が両方を広く認めるっていう感覚を僕にもたらしたんだと思っています。もっとも僕は好奇心が旺盛で、日本のものも外国のものも同じように気になって仕方がなかったっていう性格だからっていうのが、いちばん今の自分を造っていると思いますね。

河合　国内外で雅楽の演奏活動をなさっていらっしゃいますが、今の若い人たちにはなじみの薄い雅楽に興味を持たせるという点で、難しさをお感じになることはありませんか？

東儀　僕は伝え教えるという場がとても多く、そういう時間をすごく楽しんでも居られるんです。その時にいつも思うのは、教えられようとする側の人をいかに能動的に一歩踏み出させるかということです。興味を

持ってもらわなければ、それはどんなに時間をかけてしゃべっても通り過ぎていっちゃう。自分から知りたくなってしまうわくわく感をまず最初に与える。たとえば篳篥（ひちりき）を子どもに説明するとすれば、「これ、何に見える？」とか、「こうやると葉巻に見えるね」とか、「この角度からみると空飛ぶ円盤かな」とか、そういう風にまず、なんだろうっていう興味、疑問を持たせる。疑問を持った時にそれを解決したくなるという、自ら動く衝動っていうのを大事にしたいと思うんです。そしてドラえもんの曲が好きだという子がいればそれを篳篥で吹いてしまう。自分の好きな音楽を全く知らない楽器で奏でられたときの刺激とか驚きがあれば、すぐに近寄って来てくれるんですね。これは大事な話だから聞きなさい、なんていうより、自分で大事にしたくなる下敷きを作ってあげることが、何においても大事だと僕は思っています。

自信を持つということ

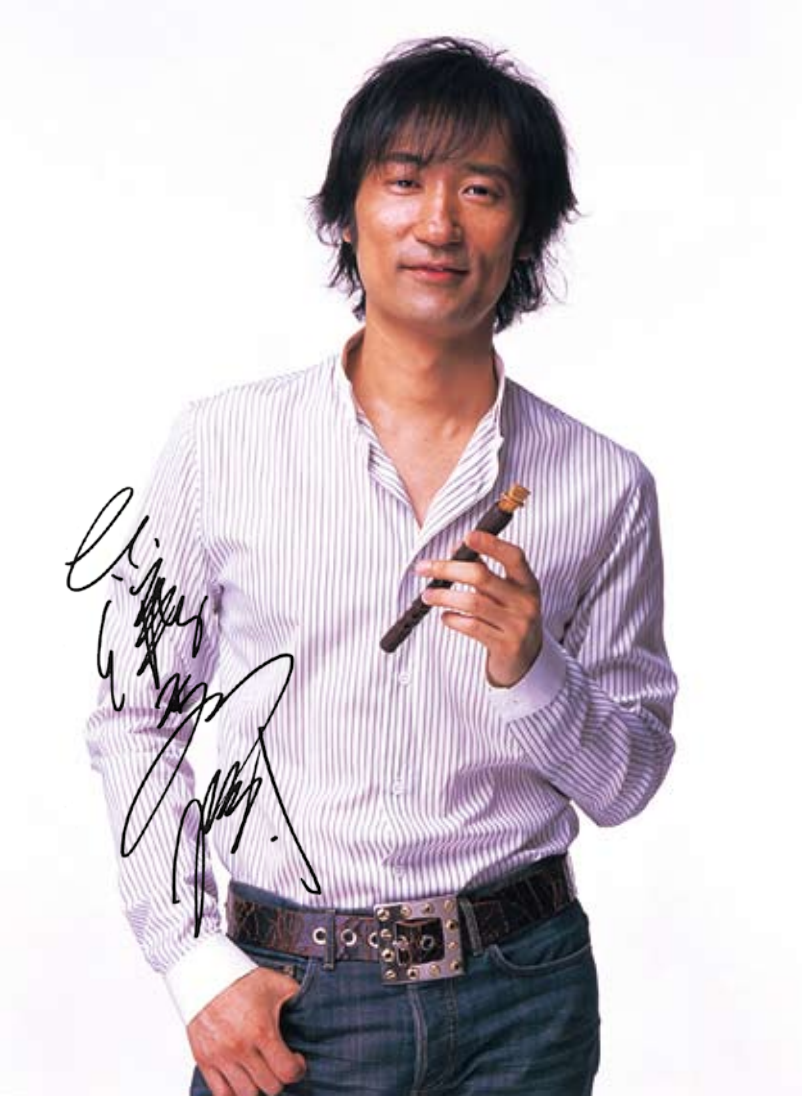
河合　東儀さんご自身も現在子育て真っ最中と伺いましたが、同じ経験をなさっておられる方々にメッセージをいただけるとしたら、どのようなことを伝えたいとお考えでしょうか？

東儀　子どもって、そっぽ向いてるようでも、いつでも周りの雰囲気を吸収していると思うんです。大人がニコニコ笑い合っているっていう空気があるだけで、子どものいる環境が自然に精神衛生的に安定する。大人が幸せじゃなければ子どもだって幸せじゃないと思います。それと、子育てで悩んでどうしたらいいかわからないという時に、本を買ってきて方法論から入るとすれば、それは百家族あったら百家族の個性があるべきところを、本に書いてあることをそのまま取り入れることで価値観を単一化させることになってしまう。他の家がそうだからうちもそうしなきゃあ、っていう強迫観念にも苛まれる。こうなると被害者は子どもだと思うんです。子どもはもしかしたら別のところに羽ばたこうとしているかもしれないのに、本にこう書いてあるからという大人の判断で勝手に、しかも導くという名のもとに変な引張りが生じたりする。それは僕はすごくおかしな世界だと思う。うちではこうなんだっていう、人と違うことに対する誇りみたいなものを取り戻すべきだと思いますね。

人とは違う意見を持っているけど、それがその子の個性であって、どんな個性にも価値があるんだ、ほかの人から変だと思われたってその子には価値があるんだっていうことを、親自身が思って欲しいです。親がそういう姿勢で子どもと接していれば、子どもが迷った時、自分の個性は、誰が褒めなくても自分が褒めてやればいいんだっていう自信を、持っていられるようになると思います。

河合　大人から見たら理解しにくい部分のある今の若者たちを、一〇〇％受け入れることでもないんだけど、否定はしないよ、一人ひとりいろいろな考え方、やり方があっていいんだから、ということですね。その思いを若者たちに伝えたい、特にいじめに遭っているような子どもたちに伝えたいですね。

東儀　そう思います。誰でも好き嫌いがあるんだっていうこと、嫌いなものを無理に好きにならなくたっていいんだ、嫌いなものをどうして嫌いかっていうことを自分の中ではっきりさせておくこと。どうしてこっちが好きなんだろう、どうしてそっちが嫌いでこっちなんだろう、って



いうその理由を自分の中ではっきりさせればいいんです。自分のことを嫌いになっている人なんて居て当たり前で、そのかわり自分のことをすごく気にかけてくれる人も居るんだと思って欲しいですね。いじめている人だって、ほんとはいじめられる瀬戸際に居て、いじめられるのが怖くて先にいじめちゃってるっていうケースがすごく多いと思うし、いじめられたっていうことは、その人から嫌われたっていうだけのことで、全ての人からはじかれている訳ではないですからね。

人間が存在するということ

河合　最近出された「生きとし生けるもの」っていうCDの中に"Every Little Life"という曲がありますが、そのLittleというのは、どういう意味の"Little"なんですか?

東儀　ちょうどその時期に自分の子どもが生まれた、小さな生命が誕生したっていうこととともリンクしてると思うんですけど、ただ自分の子どもっていう短絡的なことじゃなくて、全て大きなものって目にしやすいけれど、小さなものは見過ごしてしまいそうなので、わざわざ小さいって付けてあげたくなったんです。

さらに"Every"を付けたのも、どんなに小さなものでも、存在するというだけでものすごく大きな価値があるんだっていう、これはよく学校で僕が教えることなんです。自分には価値が無いと悩んでいる子どもたち、若者たちに、君は存在しているだけでものすごく大きなエネルギーと大きな価値があって、君にしかできないことがいくらでもあるんだよと伝えたくて、その言葉に意味を込めて作りました。

河合　今は、教育の面で難しい時代だと思いますが、ご自身も大学などで教えていらっしゃるお立場から、若者たちにどんな生き方を望まれますか?

東儀　そうですね。若者の発想力を開花させるために、僕は若者の考えていることは何でもありっていう気持ちでまず受け止めてあげたいと思っています。ただ、取り違えやすいのは、節度がないということではなくて、最善のことをいつでも考えるということなんですけどね。そして何か困難に遭ったときでも、まず一番いい道はどこにあるのかっていうことに目を向ける、その先にいつでも目を向ける、そこから一秒でも未来にまず目を向けるっていうことを考えてほしいです。

いやなことがあってもそこに執着しないで、そこから一番いい未来を探すっていう方向に持って行く、目的に向かって歩いていって、なんか違うかもしれないと思ったらすぐに戻ってみる。こうして絶えず動いているっていうのは絶えず未来に近づいていることだし、止まってるってことはもう過去にも未来にもいけないってことだと思うんです。そうい

う意識は僕自身の実行体験とか、病気体験とか、音楽体験とかで感じています。特に音楽っていうのは、演奏そのものが一瞬一瞬音を出してすぐ過去になるけど、気持ちは未来に向かっているというものですから。

大学で学生に話す時は、僕だって十九から雅楽を始めて雅楽師になっているって。君たちは今から何でも選択できるところにいるんだから、気になることは全部触ってごらん、足を向けてごらん、目を向けてごらんっていう風に言います。今からでも遅くないと思って欲しい。それは年配の人にも同じことが言えると思います。もう六〇だから、もう七〇だからと歳を理由にするのはおかしいと思います。

遊び心

河合　雅楽というのは、なにか音と音を点と点で結ぶんじゃなくて、その間の音があって曲線で結ばれているような、すごく自由な遊び心があるような印象なんですが…。

東儀　そう、まさしく遊び心ですね。そして遊び心イコール好奇心だと思いますね。雅楽の、特に篳篥を例にとってみれば、旋律の中に例えばこの音からこの音にAからBに移る時に、直線がいい時もあるし、ちょっと下げてから上がるっていうカーブの方がいい時もある。このカーブ感ていうのも、必ずしも個人個人の遊び心が優先されているっていうのではなくて、絶対的なカーブっていうのがあるんです。昔の人が構築したこのカーブがいちばん生理的に気持ちがいいというのがあるはずなんですね。そういう絶対的なカーブがあると僕は信じていて、でもその絶対的なカーブを探す、見つけようと思うのは遊び心があるからできることなんですよ。いつでもスクエアに考えて計算してカーブを出そうとすると、そのカーブは絶対に快くない。遊び心の中から見つけるカーブこそがほんとに生理的にかなったカーブだと僕は信じていて、だからそういう意味で、真面目道を大切にするためにも遊び心が必要だと思いますね。

河合　生半可に大人が若者にどうのこうのと言うと、逆に、じゃあそっちはどう生きてるの?と反発される、ということになりますね。

東儀　やっぱり若者は見てますから、ああ、いいなあ、ああいう大人に自分もなりたいなぁって思わせるのは、理屈じゃなくって、実体験で見せていかないとリアルに思ってくれませんからね。魅力のある生き方をしている先生だったら、あの先生の言うことだったらじゃあ、ちょっと聞いてみようかな、ってなりますからね。そうすると、悪い方向に行こうとしている人に対しても説得力のある先生になれる。マニュアルだけでやってる人には無い説得力がある。やっぱり親にしろ、先生にしろ、あこがれて、尊敬できて笑えてって、いろんなものを全て持っていて、それが全て愛情のもとにあるから、若者はついていく気になるんだと思いますから。

河合　行き着くところは私たちの生き方なのだ、ということですね。本日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。

東儀　秀樹（とうぎ・ひでき）
一九五九年東京生まれ。奈良時代から雅楽を世襲してきた楽家（がくげ）の家系。宮中儀式や皇居において行われる雅楽演奏会などに出演するほか、海外での公演にも参加、日本の伝統文化の紹介と国際親善の役割の一翼を担ってきた。その一方で、ピアノやシンセサイザーとともに雅楽の持ち味を生かした独自の曲の創作にも情熱を傾ける。

河合　恒男（かわい・つねお）
サレジオ会司祭。一九四六年大阪出身。二〇〇五年より、日本カトリック学校連合会理事長。一九九八年よりサレジオ学院中学校高等学校校長、二〇〇六年より同学院理事長。

●インタビューを終えて・河合恒男
対談中はもちろんのこと、それが終わってからもなんとも言えないさわやかさに心を強く打たれた。人に押し付けることなく、周りの人々とわくわくしながら共に生きることを目指しておられる東儀さんを知れば知るほど、もっと多くの若者や特に子育て中のお母さん方に話していただきたいなと感じた。

Confederazione Mondiale Exallieve/i

同窓会
卒業生もファミリーの一員として大切にされています。

サレジアン・シスターズ同窓会組織 ウニオーネ
（扶助者聖母会同窓会世界連合）

「ウニオーネ」とはイタリア語で「一致」を意味し、日本では「同窓会」と同義に使っています。サレジアン・シスターズのオラトリオで学んだ少女たちが一九〇八年、ドン・ボスコの後継者四代目総長リナルディ神父の勧めに応えてトリノで国際的な同窓会組織を創設しました。活動の目的はサレジアン・シスターズの学校で受けたキリスト教教育を継続し、分かち合い、卒業後も社会の中でその成果を生かすことです。

当初はサレジアン・シスターズの指導の下に活動していましたが、一九八八年に「サレジオ家族」に属する団体と認められました。現在では困難に直面しながら働いている各地のサレジアン・シスターズを援助するプロジェクトも立ち上げています。会員の大半が女性であることもあり、女性の教育の向上や、家族、生命の保護のために地域社会の中でオピニオンリーダーとして働くことも重要な目的になってきました。

日本国内では従来から学校ごとに同窓会が組織されていましたが、一九七二年に八つの姉妹校同窓会が扶助者聖母会同窓会日本管区連合を結成して世界連合に加盟しました。単にその学校の卒業生間の親睦を図るだけではなく、地域を超えた催しを企画し、機関紙「UNIONE」を発行して会員相互の連携をはかっています。世界連合本部とも相互に情報を交換しています。

今年、扶助者聖母会同窓会世界連合は発足一〇〇周年を迎え、三月には発祥地のトリノで世界中から同窓生が集う盛大な祝賀集会が開かれました。

1998年に改められたこのマークは世界に広がる同窓生を意識し、扶助者聖マリア (Maria Ausiliatrice) の頭文字であるMAと地球のイメージが組み合わされています。

2003年のFMA同窓会世界連合第３回総会

2008年のFMA同窓会世界連合発足百周年記念集会

UNIONE誌日本では年一回発行、イタリア語版は毎月発行

■扶助者聖母会同窓会世界連合日本管区の組織

本部所在地：東京都北区赤羽台4-2-14
http://www.unionehonbu.com/

ウニオーネ短大(星美学園短期大学内)
ウニオーネ東京(星美学園高等学校内)
ウニオーネ星美ホーム(星美ホーム内)
ウニオーネ目黒(目黒星美学園高等学校内)
ウニオーネ静岡(静岡サレジオ高等学校内)
ウニオーネ城星(城星学園高等学校内)
ウニオーネ明星(サレジアンシスターズ別府修道院内)
ウニオーネ小百合(大分小百合ホーム内)

サレジオ会同窓会

現在サレジオ会が運営し、同窓会組織を有している学校は、全国に四校あります。まだサレジオ会同窓会世界連合には加盟していないため、横の連帯組織はありませんが、二〇〇五年、ローマよりサレジオ会総長チャーベス師が来日した際、東京赤羽の星美学園で歓迎会が催され、サレジオ会のそれぞれの学校の卒業生代表も一堂に会す機会を得ました。

現在は各校独自のスタイルで活動しながら、会員同士の親睦を図り、出身校の発展のための支援協力をしています。

日向学院同窓会報「若鳩」

■サレジオ会同窓会

サレジオ工業高等専門学校同窓会・育英学院同窓会(町田市)
サレジオ学院同窓会(横浜市)
大阪星光学院同窓会(大阪市)
日向学院同窓会(宮崎市)

同窓会によせる期待

サレジオ工業高等専門学校
小島知博校長(サレジオ会司祭)

本校は六〇年以上の長期にわたって教育活動を続けた杉並区から四年前に町田市に移転し、校名も通称、育英高専からサレジオ高専へと変わりました。私の実現したいことの一つは、杉並に慣れ親しんだOBと町田に移転してからのOBとのつながりを強化することです。杉並OBと町田OBが地理的な距離や世代などの相違をこえて一つになることです。

もう一つは、現在同窓会を有している学校が日本には四つあります。ドン・ボスコのファミリーとして、四つの同窓会が協力しあい、日本のサレジオの同窓会として、学校の教育活動を支援するだけではなく、日本社会に貢献する活動を展開することです。さらにアジア・オセアニア地域にある多くの同窓会との連携を深めることができれば、ますますドン・ボスコの精神のすばらしさを感じ、卒業生としての誇りを持って人々にそれを伝えることができるでしょう。

卒業生の前途を祝し、一人ひとりと力強く握手をする小島校長(2008年3月サレジオ高専卒業式)

GOOD NEWS

ちょっといい話

おにぎり献金

宮崎カリタス修道女会
Sr. 辻原 弘美

二〇〇三年、仙台教区から宮崎カリタス会のシスターに委託された福島県の白河カトリック幼稚園。昨年、この幼稚園から宮崎カリタス友の会★に一〇万円を超える寄付が届きました。

この幼稚園では、待降節（クリスマスを迎える準備の期間）に合わせて「おにぎり献金」を実施しています。待降節中の木曜日のお弁当はおにぎりのみ。そして、がまんした「おかず」「デザート」の分として一〇〇円を献金します。園児たちは木曜日になると、一〇〇円玉を小さい手に握りしめ、各クラスの祈りのコーナーに設置された献金箱に入れて祈ります。「神さま、ぼく（わたし）は、おかずとデザートをがまんして献金します。ごはんを食べられない人たちが食べられるようになりますように」。

ある園児の母親は担任の先生にこう話されました。「このおにぎり献金の趣旨を考えると、真っ白いおにぎりがふさわしいと思いましたので、海苔も巻かず、中に何も入っていないおにぎりを子どもに持たせることにしました。」次の木曜日、そのご家庭の園児は真っ白いごはんだけのおにぎりを持ってきて言いました。「先生、この白いおにぎりを食べると、白い心になれるんだよね！」。感動した先生がクラスの他の保護者にも知らせると、クラスの三分の二の子どもたちが、同じように真っ白いおにぎりを持ってくるようになったそうです。

また、幼稚園のおにぎり献金の日に合わせ、父親も含めて、家族みんな同じ気持ちでおにぎりだけをいただくというご家庭もあったとうかがいました。

園児は保育者をとおして、神様に祈ること、思いやりのある優しい心を学び、身につけていきます。たとえば、幼稚園で学んだ環境保全のことにも敏感で、「水をたくさん出しすぎだよ」「この紙を捨てるのはもったいない」などと保育者が園児に注意される場面も。家庭では、「どうしてママはエコバッグを持っていかないの？」と母親に詰め寄る園児もいるようです。そんな微笑ましいエピソードから、子どもたちの純粋な吸収力と家庭への影響力は、想像を超えて大きなものであることを実感しました。

園児たちのおにぎり献金は、人を助ける目的でありながら、園児たち自身を人間として成長させ、それにかかわる家族にも「見えない価値」について考える機会を与えるものだと言えそうです。

自ら祈ることを学びながら、あたたかいまなざしで園児たちを包み、優しく彼らの心に語りかける先生たちに愛されて、園児たちは今年も「おにぎり献金」をするそうです。

★宮崎カリタス会の宣教活動を財政的に援助するボランティアグループで、特に南米のシスターたちをとおして現地の人々、子どもたちのための活動援助を続けています。

「風」のギャラリー

無原罪の聖母

宮崎カリタス修道女会総長
Sr. アポリナリス 志村 百合子

キリストの母 聖マリアには様々な称号があります。そのうちのいくつかについては特別な日が定められ、世界中の教会でお祝いが行われます。その一つ12月8日は「無原罪の聖母マリアの祭日」とされています。この無原罪とはどういうことなのでしょうか。

それを理解するためにはイエス・キリストとの関係から考えるべきでしょう。キリストは、罪のある人間に代わって十字架に付けられて死に、3日目に復活なさいました。そのおかげでわたしたちは罪からの救いを約束されたのです。マリアこそはこの救い主イエス・キリストを生むべき女性として神から選ばれ、そのために原罪のけがれを免れてこの世に生まれてきた方です。教会は、1854年12月8日にこのことを正式に宣言して無原罪の聖母マリアというようになり、神の救いの計り知れない導きと、その恵みをいただく者の幸せを強調しました。

フランスの南西部、ピレネー山脈のふもとにルルドという町があります。1858年にここで、ベルナデッタという14歳の少女の前に貴婦人が現れ、彼女に「罪びとのために、祈りなさい」というメッセージを残されました。ベルナデッタがこのことを話すと、最初は家族からも教会の神父や司教からも信じてもらえず、多くの人々から疑いの目で見られ、相手にされませんでした。司祭から「こんど、その貴婦人が現れたら、どなたか尋ねてみなさい」といわれたベルナデッタは、そのとおりに貴婦人に質問しました。するとその方は「わたしは無原罪の宿りである」とお答えになりました。

1854年に教皇ピオ9世が聖母の無原罪を宣言したこと、そしてその4年後のルルドでのこの出来事によって、19世紀に無原罪ブームがまきおこったといわれています。この時からちょうど150年目に当たる今年9月には、現在の教皇ベネディクト16世もこの地を巡礼訪問されました。

150余年前にマリアの無原罪を宣言した教会は、今も私たち一人ひとりに呼びかけています。貧しいおとめマリアに目を留め、彼女を信頼された神様は、誰に対しても無関心ではありません。今もあなた方一人ひとりに愛のまなざしを注ぎ、幸せな人生、意義深い人生へと招いておられます。さまざまな困難に出会っても失望しないでください。無原罪の聖母の助けに信頼しながら、神様のこの招きに答え続けましょう。（ベネディクト16世、ルルド訪問での若者たちへの挨拶参照）

［写真：谷　裕文］

みことばマジック

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」

（マタイ福音書４章４節）

わたしたちは生きています。パン(食べ物) を食べて生きています。でも正確に言うと「生かされています」。わたしたちは神様から命が与えられて生きているからです。これは誰もが認めざるを得ない事実、真実ではないでしょうか。

私たちが神様から命を頂き、生かされていることを認めるのであれば、命を与え人生の道を歩ませる神様が私たちに何かを期待しておられると考えられます。神様は、一体何を私たちに望み、期待しておられるのでしょう。神様の望みや期待に応えるためにも私たちはそれを知る必要があります。神様の望みや期待、それは「神の口から出る一つ一つの言葉」。冒頭の聖書の言葉の意味が少しずつわかってきます。

でもどうやって神様の思いを人間である私たちが知ることができるのでしょう。皆さんは、自分の思いを誰かに伝えるためにどのようにしていますか。きっとその思いを「言葉」にして伝えているでしょう。言葉だけでは足りず、態度や行いで自分の思いを示すに違いありません。実は神様もそのようになさっているのです。

「み言葉は人となり、私たちのうちに住まわれた」
（ヨハネ福音書１章 14 節）

人間を含め天地万物を創造された神様は、人間にご自分の思いを直接に伝えたくて人となられました。（これがクリスマスの出来事です。）神様は、人となった神であるイエス・キリストを通して、人間を愛し祝福しておられること、幸せに生きることを切に望んでおられる思いを言葉にして伝えられたのです。また人としての生き方が互いに愛し合うことであると諭されました。罪の重みに苦しむ人間のその苦しみを、自らも十字架に架けられることで味わい、許しの恵みがあること、人を許すことの大切さを教えて下さいました。そして人間として一番大切なものである命を、そのために捧げられ、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ福音書 15 章 13 節）ことをご自分の生き方で示してくださったのです。

このように神様の私たちに対する思い、「み言葉」は、イエス・キリストによって示されているのです。そのメッセージが書き記されているのが「聖書」なのです。

あなたへの神様の思い、望みと期待がここにあります。あなたも聖書を読んでその「み言葉」を味わってみませんか。

聖書の一節を日毎に簡単に説明しているホームページを紹介致します。聖書を読んでみたけれどもわからないとか、この聖書の言葉はわたしにどんなメッセージを与えているんだろうと思った方は、どうぞアクセスしてみてください。

「み言葉の食卓」
http://www.hpmix.com/home/salesio

Mickey MURAMATSU（村松 泰隆）
サレジオ会司祭。マジシャンとしての腕前はサレジアン・ファミリーの中では超有名。特に子どもたちから大人気です。その技を活かし、み言葉にマジックをかけて皆様にお届けします。

［イラスト：ヨーヘイ］

SALESIAN WORLD NEWS

サレジアン・シスターズの新しい総長決まる。

【ローマ】今年９月から11月中旬までローマ本部で行われたサレジアン・シスターズ総会で、次の６年間を導く総長として、マードレ・イヴォンヌ・ランゴアが選出されました。総長としては初のフランス人宣教女で、フランスとアフリカの管区長、そして副総長を歴任された国際感覚豊かなシスターです。選出され、お引き受け下さいますかとの問いに新総長は「マリア様とマードレ・マザレロの御助け、そして皆さまの助けに信頼して、お引き受けいたします」とお答えになりました。

Special Thanks

学校連合会に感謝

創刊号及び第２号の発行は、サレジオ会学校連合会の全面的なご後援により実現しました。関係の皆様に心より感謝申し上げます。

ご寄付に感謝

早くもご寄付をお寄せいただいています。お預かりした寄付金は、今後の発行のために使わせていただきます。
ありがとうございました。

本誌記事へのご感想、ご要望をお寄せください。

創刊号に寄せられた声の一部をご紹介します。

・貴誌の内容は誰にでもわかりやすく、読みやすく、今後に期待します。大分県・H.M 氏

・新しい取り組みがドン・ボスコのとりなしとマリア様の保護のもと、神の恵み豊かに実りますように。大分県・T.M. 氏

・「ドン・ボスコの風」を僕は何度も何度も読み返しています。次号が楽しみです。横浜市・T.H. 君

サレジオ会の創立者、聖ヨハネ・ボスコの意向に従いBollettino Salesianoの日本版「ドン・ボスコの風」は無料で、サレジオ家族の学校、事業所、小教区、家庭に配布されます。サレジオ家族にとって大切な意味を持つこの雑誌は、第３号以降は読者の皆さまからのご寄付によって賄われます。下記の郵便振替口座をご利用いただきご意見ご感想と共にご寄付を賜りますことを、編集部一同心よりお願い申し上げます。

郵便振替　口座番号　00100-7-412947　加入者名　「ドン・ボスコの風」編集事務局

ドン・ボスコの風 No.2
BOLLETTINO SALESIANO
2008年12月８日発行

編集人　梅村 護
発行人　プッポ・オランド
発行所　サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ管区長館
電話：03-3353-8355　Fax：03-3353-7190
Eメール：db-no-kaze@fiberbit.net
郵便振替　00100-7-412947
アートディレクター　後藤 宏幸

お詫びと訂正

創刊号P.10サレジアン・シスターズの教育事業の表から「小百合ホーム(大分県大分市)」が抜けておりました。お詫びして訂正させていただきます。

from Editor　編集後記

サレジアン・ファミリーにとって最大の関心事である青少年の教育を取り上げました。編集作業が進めば進むほどこのテーマの深さを知り、皆さまへお伝えすることの大切さを実感しました。また、第２号ではドン・ボスコのエピソード、ちょっといい話、風のギャラリー、みことばマジックがスタートしました。

(M)

ドン・ボスコの風 2 2008年12月
BOLLETTINO SALESIANO DICEMBRE 2008

SALESIAN TIMES

DECEMBER 8, 2008

ストレンナ二〇〇九発表

毎年サレジオ会総長よりサレジアン・ファミリーに示されるストレンナ（イタリア語で贈り物）と呼ばれる年間の努力目標二〇〇九年版が発表されました。

一五〇年前にドン・ボスコによって蒔かれた「青少年を救う」種が、小さな活動として芽生え、いろいろな事業に発展し、成長して大きな枝葉の木となりました。この木がさらに大きくなり、みんなを守る憩いの木となるために働くよう私たちは招かれています。

今日の青少年がおかれている状況をよりよく理解し、サレジアン・ファミリーで協力し合いながら、彼らの育成のために心を尽くしましょう。

ストレンナ2009

青少年を救うための幅広い運動に、サレジオ家族で邁進していきましょう。

聖書(マタイ13章31～32)

天の国はからし種に似ている。人がこれをとって畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣をつくるほどの木になる。

サレジオ会創立150周年記念

サレジオ家族の昨日、そして、今日。

種は一本の木に、そして、木は森になった。

管区長感謝の集いにサレジアン・ファミリー集合

プッポ管区長へ六年間の感謝をこめて

十一月十五日、東京調布市のサレジオ神学院の聖堂に、サレジオ会、サレジアン・シスターズ、カリタス修道女会、サレジアニ・コオペラトーリ等サレジアン・ファミリーのメンバーが一堂に会し、プッポ管区長への感謝をこめてミサが捧げられ、その後ドン・ボスコホールで懇親会が催されました。

プッポ管区長は、今年度いっぱいで管区長としての六年の任期が終了します。この日、最後に挨拶したカリタス修道女会副管区長は、プッポ管区長がサレジオ会の新しい動きを模索し、実現させたことのひとつとして、この「ドン・ボスコの風」誌の発刊を挙げ、会衆一同が拍手でその喜びを表わしました。

発行：サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局　〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ管区長館
TEL: 03-3353-8355 FAX: 03-3353-7190 Eメール：db-no-kaze@fiberbit.net